



日本生態学会

No.32

2014年1月

ニュースレター

[目次]

記事

I. 次々期会長及び次期全国委員選挙結果	1
II. 全国委員会承認事項	1
III. 書評依頼図書	1
IV. 寄贈図書	2
V. 地区会報告	2

お知らせ

1. 関東地区生態学関係修士論文発表会	11
---------------------------	----

書評	11
----------	----

京都大学生態学研究センターニュース	14
-------------------------	----

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。
下記会費および地区会費の合計を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

退会する際は前年12月末までに退会届を事務局まで提出してください（ウェブサイトにて申込フォーム有り）。
会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	年会費* (保全誌購読者**)	大会発表	総会・委員 (選挙・被選挙権)
正会員（一般）	11000円 (13000円)	○	○
正会員（学生）	8000円 (10000円)	○	○
団体会員	22000円	×	×

*生態学会では収入の少ない若手一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施します。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

**非会員の方の保全誌定期購読料は年額5000円です。
なお、保全誌は発行後2年間、オンラインアクセスができません

【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 正会員・保全誌定期購読者のみ有
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

【冊子を必要としない（オンラインアクセスのみの）会員への割引】

- ・日本生態学会誌 600円
- ・Ecological Research 900円

既会員の方が今後申請される場合は、割引を受けたい年の前年10月末までに問い合わせページを通じて事務局へご連絡ください。

新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年より適用されます。

地区会費

正会員は、住所（所属機関か自宅のうち、郵送物の配布先となっているほう）により、地区会に参加することになっています。各地区会ではそれぞれ独自に地区会費を定めています。学会費の納入時には、これらも含めて請求しますので、あらかじめご了承ください。

- ・北海道地区（200円）：北海道
- ・東北地区（600円）：青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県
- ・関東地区（400円*）：茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県
- ・中部地区（0円）：長野県・新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
- ・近畿地区（400円）：滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
- ・中・四国地区（400円）：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
- ・九州地区（700円）：福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県

*ただし当面は徴収しない

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

Tel&Fax 075-384-0250 <http://www.esj.ne.jp/>

※お問い合わせはウェブサイトからお願い致します。

記 事

I. 次々期会長及び次期全国委員選挙の結果について

2013年10月31日に投票を締め切り、11月5日に日本生態学会事務局において開票を行った結果、次々期会長および第17期全国委員は下記のように決定いたしました。

日本生態学会選挙管理委員会
委員長 谷内 茂雄

総投票数 670 票 (電子投票 583 票 郵送投票 87 票)

1. 会長 (任期 2016 年 1 月～2017 年 12 月)

選出 可知 直毅 176 票
次点 湯本 貴和 107 票
嶋田 正和 98 票
宮下 直 75 票
河田 雅圭 62 票
その他 83 名 (合計) 117 票

2. 全国委員 (任期：2014 年 1 月～2015 年 12 月)

1) 全国選出の全国委員 (15 名)：同得票数の場合は年少者を優先します。次点者までを示しました。

順位	氏名	所属地区会	得票数
選出	1	河田雅圭	(東北) 59
選出	2	中静透	(東北) 56
選出	2	竹中明夫	(関東) 56
選出	2	粕谷英一	(九州) 56
選出	5	吉田丈人	(関東) 53
選出	6	辻和希	(九州) 50
選出	7	宮下直	(関東) 49
選出	8	西廣淳	(関東) 48
選出	9	大手信人	(関東) 47
選出	9	矢原徹一	(九州) 47
選出	11	宮竹貴久	(中四国) 45
選出	12	中村太士	(北海道) 44
選出	13	日浦勉	(北海道) 42
選出	14	加藤真	(近畿) 41
選出	15	近藤倫生	(近畿) 38
次点	16	正木隆	(関東) 37

2) 地区選出の全国委員 (7 名)：選出・次点ともに、全国選出でも選出された場合は全国選出を優先し、同得票数の場合は年少者を優先します (*)。 () 内は得票数で、次点者および同得票数獲得者まで示しました。

北海道 (全国)日浦勉(14) 選出：野田隆史(11) 次点：綿貫豊(8)* 高田壯則(8)*
東北 選出：黒川紘子(11)* 次点：松木佐和子(11)*
関東 (全国)西廣淳(24) (全国)吉田丈人(16) (全国)竹中明夫(11) (全国)宮下直(11)
選出：上條隆志(10) 次点：寺島一郎(9)
中部 選出：浅見崇比呂(8) 次点：増沢武弘(7)
近畿 選出：井鷲裕司(12) 次点：丑丸敦史(9)* 中野伸一(9)*

中四国 選出：永松大(7) (全国)宮竹貴久(6)
次点：中坪孝之(5)* 國井秀伸(5)*
九州 (全国)粕谷英一(15) (全国)辻和希(12)
選出：巖佐庸(10) (全国)矢原徹一(10)
次点：久保田康裕(8)

3. 地区別会員数・投票者数及び投票率

	会員数	投票者数	投票率 (%)
北海道	402	80	19.9
東北	289	53	18.3
関東	1418	224	15.8
中部	588	79	13.4
近畿	722	112	15.5
中四国	279	46	16.5
九州	321	67	20.9
海外	35	9	25.7
全国	4054	670	16.5

II. 全国委員会承認事項

1. 選挙管理委員承認

高原 光 (京都府立大)
鳥居 厚志 (森林総研関西)

2. 学会各賞受賞者決定

第12回日本生態学会賞
占部 城太郎 (東北大学大学院生命科学研究科)
甲山 隆司 (北海道大学大学院地球環境科学研究院)
第18回日本生態学会宮地賞
小野田雄介 (京都大学大学院農学研究科)
佐藤 拓哉 (神戸大学大学院理学研究科)
杉浦 真治 (神戸大学大学院農学研究科)
山浦 悠一 (北海道大学大学院農学研究科)
第7回日本生態学会大島賞
市岡 孝朗 (京都大学大学院人間・環境学研究科)
久保田康裕 (琉球大学理学部)
第2回日本生態学会奨励賞 (鈴木賞)
飯田 佳子 (ミシガン州立大学植物生物学部)
鈴木 俊貴 (総合研究大学院大学先端科学研究科)
深谷 肇一 (統計数理研究所統計思考院)

III. 書評依頼図書 (2013 年 5 月～2013 年 12 月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@mail.esj.ne.jp) までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 小山重郎著「昆虫と害虫 害虫防除の歴史と社会」(2013) 288pp. 築地書館 ISBN:978-4-8067-1456-9
2. 川井唯史・中村太士編「北海道水辺の生き物の不思議」(2013) 208pp. 北海道新聞社 ISBN:978-4-89456-696-8
3. 樋口広芳著「鳥・人・自然 いのちのにぎわいを求めて」(2013) 340pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-

- 13-063336-9
4. 帰山雅秀・永田光博・中川大介編著「サケ学大全」(2013) 298pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-8329-8210-9
 5. 遠藤秀紀著「動物解剖学」(2013) 122pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062222-6
 6. 毛利衛・進士五十八責任編集「地球社会の環境ビジョン—これからの環境学—」(2013) 214pp. 財団法人日本学術協力財団 ISBN:978-4-9904989-5-5
 7. 牧野光琢著「日本漁業の制度分析 漁業管理と生態系保全」(2013) 256pp. 恒星社厚生閣 ISBN:978-4-7699-1454-9
 8. 東京大学アジア生物資源環境研究センター編「アジアの生物資源環境学 持続可能な社会をめざして」(2013) 248pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-071106-7
 9. 大川ち津る著「大川式植物検索入門 植物の特徴を見分ける本」(2013) 128pp. 恒星社厚生閣 ISBN:978-4-7699-1455-6
 10. 日本魚類学会自然保護委員会編「見えない脅威”国内外来魚” どう守る地域の生物多様性」(2013) 256pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-01980
 11. 井上英治・中川尚史・南正人著「野生動物の行動観察法 実践日本生態学会の哺乳類学」(2013) 186pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062223-3
 12. 井鷲裕司・陶山佳久著「生態学者が書いた DNA の本メンデルの法則から遺伝情報の読み方まで」(2013) 200pp. 株式会社文一総合出版 ISBN:978-4-8299-6522-1
 13. 近藤敬治著「日本産哺乳動物毛図鑑 走査電子顕微鏡で見る毛の形態」(2013) 234pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8211-6
 14. 池谷和信編「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第2巻 生き物文化の地理学」(2013) 374pp. 海青社 ISBN:978-4-86099-272-9
 15. 山口裕文編著「栽培植物の自然史Ⅱ 東アジア原産有用植物と照葉樹林帯の民族文化」(2013) 384pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8206-2
 16. 三上修著「スズメつかず・はなれず・二千年」(2013) 122pp. 岩波書店 ISBN:978-4-00-029613-7
 17. 綿貫豊著「ペンギンはなぜ飛べないのか？海を選んだ鳥たちの姿」(2013) 128pp. 恒星社厚生閣 ISBN:978-4-7699-1464-8
 18. 大西文秀著「流域圏からみた日本の環境容量—日本のバイオリージョン—全国109流域3D-GIS MAP—」(2013) 222pp. 大阪公立大学共同出版会 ISBN:978-4-907209-08-7
 19. 八杉貞雄監訳 佐藤賢一・澤進一郎・鈴木準一郎・浜千尋・藤田敏彦共訳「スター生物学」(2013) 346pp. 東京化学同人 ISBN:978-4-8079-0836-3
 20. 樋口広芳編「日本のタカ学 生態と保全」(2013) 358pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060223-5
 21. 上田恵介・岡ノ谷一夫・菊水健史・坂上貴之・辻和希・友永雅己・中島定彦・長谷川寿一・松島俊也編

集「行動生物学辞典」(2013) 650pp. 東京化学同人 ISBN:978-4-8079-0837-0

IV. 寄贈図書

1. 「うみうし通信 No.80」(2013) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所
2. 「果樹研究所研究報告 第16号」(2013) 42pp. 農研機構・果樹研究所
3. 「第53回事業報告書」(2013) 146pp. 公益財団法人東レ科学振興会
4. 「Marine Geology Map no.82 (CD)」(2013) 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
5. 「公益財団法人下中記念財団2013年報」(2013) 88pp. 公益財団法人下中記念財団
6. 「第37回2012年度年報」(2013) 416pp. 公益財団法人鹿島学術振興財団
7. 「学術会議叢書20 放射能除染の土壌学」(2013) 176pp. 公益財団法人日本学術協力財団
8. 「原発ゼロ社会への道 新しい公論形成のための中間報告」(2013) 114pp. 原子力市民委員会
9. 「高木基金だより No.34」(2013) 12pp. 認定NPO法人高木仁三郎市民科学基金
10. 「うみうし通信 No.81」(2013) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所

V. 地区会報告

北海道地区会

2012年度地区会報告(2012年4月1日～2013年3月31日)

- (1) 安平川湿原の大規模フェンの視察を7月16日に行い、それをもとに8月9日に「安平川湿原の大規模フェンの保全のための要望書」を道に提出した。
- (2) 11月19日に北海道若手生態学研究会の共催および助成依頼を承認した。
- (3) 2012年度北海道地区会大会を開催した。
2013年2月22日(金)10:00 - 北海道大学環境科学院/地球環境科学研究院 D201
参加者: 62名

【若手の部】

「岩礁間帯生物群集への東北地方太平洋沖地震の及ぼすインパクト」飯田光穂(北大・環境科学院)

「餌資源がサケ科魚類の活動時間に与える影響」田中友樹(北大・環境科学院)・小泉逸郎(北大・創成)

「局所的な環境の違いがキツネの食性に与える影響」安生浩太(北大・環境科学院)・浦口宏二(道立衛生研)・齊藤隆(北大・FSC)

「タイリクモモンガの捕食者認識」鈴木圭(岩手大学大学院)・佐川真由・柳川久(帯広畜産大学)

「働き者は報われる: 乱婚のヤツメウナギ雄の協力的造巣行動と交尾成功」山崎千登勢(北大・環境科学院)・小泉逸郎(北大・創成)

「流水性イシガイ目二枚貝における水路の連続性の重要性—生息地保全への提言—」玉置弘幸・根岸淳二郎(北大・環境科学院)・永山滋也((独)土木研究所 自然共生研究センター)・渡辺のぞみ(北大・環境科学院)・

萱場祐一（（独）土木研究所 自然共生研究センター）・川瀬基弘（愛知みずほ大学人間科学部）

「クラッチサイズのシーズン変化：複数回繁殖するシジュウカラにおける新しいパターン」乃美大佑（北大・環境科学院）・油田照秋（北大・環境科学院）・小泉逸郎（北大・創成）

「オオバキスミレにおける繁殖戦略の種内変異」速水将人（北大・環境科学院）・細川一実（札幌市）・木村耕（北大・院・水産）・大原雅（北大・環境科学院）

「Post fire restoration study of ash and moisture variation effects on seed germination of *Colocynthis citrullus* and *Vigna unguiculata*」Appiah Catherine（北大・環境科学院）・露崎史朗（北大・環境科学院）・Jonathan Castel（北大・環境科学院）

「光・低温ストレスに対するクマイザサの生理的応答」橋口恵（北大・環境科学院）・小野清美・原登志彦（北大・低温研）

「標高勾配におけるダケカンバの食害度の変異は温度によってもたらされているのか？—温暖化操作実験による温度効果の検証—」簗島萌子（北大・環境科学院）・中村誠宏（北大・FSC）

「外来種駆除に伴う混獲の実態と対策：捕獲場所と時期に着目した具体的な混獲軽減策の提言」高屋浩介（北大・環境科学院）・阿部豪（兵庫県立大）・佐鹿万里子（北大獣医学研究科）・金子正美（酪農学園大）・小泉逸郎（北大創成・環境科学）

「東北地方太平洋沖地震後の岩礁潮間帯生物群集：帯状分布の時空間パターン」岩崎藍子（北大・環境科学院）・飯田光穂・萩野友聡・阪口勝行・佐原良祐・野田隆史（北大・環境科学院）

「流域スケールにおける水生昆虫群集の種多様性維持機構-水文過程の異なる河川の役割」渡辺のぞみ（北大・環境科学院）・根岸淳二郎（北大・環境科学院）・布川雅典・中村太士（北大・農学院）

「エゾヤチネズミの遺伝的空間構造の年次変化—雌雄の分散パターンに着目して—」杉木学（北大・環境科学院）・齊藤隆（北大SFC）

【一般の部】

「釧路湿原温根内におけるハンノキ林伐採後13年間にみられた林床植生の変化」佐藤雅俊（帯畜大・畜産生命）
「Population and Ecological Studies of the Invasive Pioneer Species *Chromolaena odorata* and the Application on Post-Mining Land Restoration and Forest Regeneration」ジェトロ・ジョナタン・カステル・露崎史朗・大原雅（北大・環境科学院）

「若手の部」では14件、「一般の部」では2件の発表があった。「若手の部」発表者の中から5名の審査員による判定の結果、速水将人（北大・環境科学院）、簗島萌子（北大・環境科学院）、杉木学（北大・環境科学院）の3名に賞状および副賞を授与した。

(4) 2012年度（平成24年度）北海道地区会総会を開催した。

2013年2月22日（金）17:15 - 北海道大学環境科学院 / 地球環境科学研究院 D201

審議の結果、以下の3点が了承された。

- 1) 露崎庶務幹事より庶務報告がなされ承認された。
- 2) 野田会計幹事より会計報告がなされ承認された。
- 3) その他

生態学会法人化に関する状況報告があった。

東北地区会

(1) 東北地区会第57回大会を開催

開催日：2012年10月20・21日

会場：福島県フォレストパークあだたら・福島大学

10月20日（フォレストパークあだたら）

企画公開シンポジウム『福島第一原子力発電所事故の生物と生態系への影響』

「作物やキノコへの放射性物質の移行」塚田祥文（福島大）

「福島第一原発事故による哺乳類への放射能の影響：イノシシの影響と課題」大概晃太（福島ニホンザルの会）

「福島第一原発事故による哺乳類への放射能の影響：ニホンザルの影響と課題」今野文治（JA新ふくしま）
「第一原発事故以降加速する福島県での狩猟離れとその影響」伊原禎雄（奥羽大・生物）

「阿武隈川を流れる放射性物質」難波謙二（福島大・共生システム理工学類）

10月21日（福島大学）

ポスター発表（一般発表）

「西シベリア・チャニー湖河口域における吸虫類セルカリア幼生の放出量と摂食量の推定」鹿野秀一（東北大・東北アジア）・金谷弦（環境研）・浦部美佐子（滋賀県立大・環境）・Yurlova Natalia（動物分類学生態学研、RAS SB）・羽田敏博（東北大院・生命）・Rastyazhenko Natalia（動物分類学生態学研、RAS SB）

「ケフサイソガニとタカノケフサイソガニの遺伝的分化」勝部達也（東北大・理・生物）・牧野渡・鈴木孝男・占部城太郎（東北大院・生命科学）

「*pgi* 遺伝子型頻度は温度や餌環境を反映しているか？：Daphnia（ミジンコ）による検証」檜森隆太（東北大・生命）・牧野渡（東北大・生命）・占部城太郎（東北大・生命）

「有鐘織毛虫の形態分類と核DNA系統の不一致」風間健宏（東北大院・生命）・石田聖二（東北大IAREO）・島野智之（宮城教育大EEC）・占部城太郎（東北大院・生命）

「水田生物相に対する津波の影響」鈴木朋代・向井康夫・占部城太郎（東北大・理）

「ナラ枯れで失われる恐れのある里山旧薪炭林の経済評価」今村航平（東北大・院・生命科学）・馬奈木俊介（東北大・院・環境科学）・中静透（東北大・院・生命科学）
「表土が失われた土壌へのブナ植林における土壌改良効果～秋田県森吉山麓自然再生事業の事例より～」金丸孔明（秋田県大・生物資源）・佐藤孝・蒔田明史（秋田県大）

「分子系統学的手法を用いたヒトツバイチヤクソウ *Pyrola japonica* f. *subaphylla* の正体の解明」首藤光太

郎（福島大・院・共生システム理工）・兼子伸吾・黒沢高秀（福島大・共生システム理工）
「尾瀬・大江湿原におけるニッコウキスゲのシカ食害の影響：被食シュートの追跡結果」高橋啓樹・木村勝彦（福島大学）

(2) 地区委員会報告

2012年度定例地区委員会は、2012年10月20日にフォレストパークあだたら（福島県）において開催され、以下の議題について報告および審議がなされた。出席者は以下の13名であった。石田清・占部城太郎・木村勝彦・黒沢高秀・鹿野秀一・鈴木孝男・陶山佳久・清和研二・竹原明秀・星崎和彦・蒔田明史・松木佐和子（地区会活性化ワーキンググループ）・八木貴信（会計幹事）

<報告事項>

- ・庶務報告
- 1) 2012年3月21日：日本生態学会東北地区会会報72号を発行した。
- 2) 2012年7月24日：7月17日に締め切られた地区委員選挙（選挙管理委員：鹿野秀一氏・千葉聡氏）の結果、以下の23名が選出された（任期：2012年8月1日～2014年7月31日）。
青森県3名：東信行、石田清、佐原雄二（次点：鳥丸猛、武田哲）
岩手県4名：鈴木まほろ、松政正俊、松木佐和子、竹原明秀（次点：東淳樹）
宮城県9名：占部城太郎、陶山佳久、鹿野秀一、中静透、黒川紘子、清和研二、河田雅圭、千葉聡、鈴木孝男（次点：彦坂幸毅）
秋田県2名：星崎和彦、蒔田明史（次点：井上みずき、成田憲二）
山形県3名：玉手英利、林田光祐、小山浩正（次点：辻村東國）
福島県2名：黒沢高秀、木村勝彦（次点：兼子伸吾）
- 3) 2012年8月1日：地区委員の互選の結果、地区委員長に清和研二氏（東北大学）が選出された。また、地区委員長の委嘱により、庶務幹事を深澤遊氏（東北大学）、会計幹事を八木貴信氏（森林総研）が引き受けることになった。
- 4) 2012年9月25日：第57回地区大会地区大会及び総会の案内を発送した。
- 5) 2012年10月16日：第57回地区大会のプログラムを発送した。
- 6) 2012年10月20日：福島県土湯温泉フォレストパークあだたらにおいて、地区委員会および地区懇談会を開催した。
- 7) 2012年10月21日：福島大学において第57回地区大会、総会及び公開シンポジウム「福島第一原子力発電所事故の生物と生態系への影響」を開催した。
- ・会計報告
2011年度決算報告とその会計監査報告、2012年度の間報告ならびに今後の執行見込について報告があり、了承された。
- ・地区会活性化ワーキンググループ

幹事の松木佐和子氏から、今回の地区大会の開催を10月に設定したこと、ならびに懇談会の開催を企画したことについて経緯の説明がなされた。

- ・岩手生態学ネットワーク
岩手県地区委員の松木佐和子氏から報告がなされ、順調に活動が行われていることの説明がなされた。

<審議事項>

- ・日本生態学会の法人化に伴う地区会の繰越金および会費の取り扱いについて
日本生態学会が法人化した場合には、事務局が会計を一括管理することを受入れることにした。その場合、現在の繰越金を含め地区会会計は全て委譲するが、現在の地区会活動を維持するために必要な経費を確保できるように事務局に要請することや、現在持っている繰越金を近年中に有効に利用した方がよいなどの意見がだされた。これらの意見を地区委員長が取りまとめ、地区委員会にメールで図った上、学会事務局に東北地区会の意見として伝えることになった。
 - ・地区会の開催日程について
地区会の活性化と合わせて、地区会事務局、大会開催地、地区会活性化ワーキンググループが検討を続けることとなった。また、地区委員長から地区会活性化ワーキンググループは現在の活動を継続して欲しい旨の発言があり、了解された。
 - ・2013年度予算
2013年予算案について説明がなされたが、上記の地区活性化の推進と繰越金の有効利用を図る手段として、地区大会活性化費に30万円を計上することが検討され、その点を修正した上で了承された。
 - ・次回、次次回大会開催地
次回地区大会を青森県で開催することが、昨年度の決定事項に基づいて了承された。
次々回地区大会は、岩手県で開催することが承認された。
 - ・その他
岩手県の竹原明秀氏から、「早池峰地域のエコパークを目指した復興事業とそれに関わる自然保護の立場からの要望」（案）が提出されたが、バックグラウンドが不明確であり審議に十分な時間がとれない等のこともあり、今後メール会議で議論していくことになった。
- ## (3) 総会報告
- 2012年度東北地区会総会は、2012年10月21日に開催され、総会議長に木村勝彦氏を選出し、以下の議題について報告および審議がなされた。
- ・地区委員会における庶務報告・会計報告が了承された。
 - ・地区会活性化ワーキンググループと岩手生態学ネットワークの活動について、それぞれ報告がなされた。
 - ・日本生態学会の法人化に伴う地区会の繰越金および会費の取り扱いについて、地区委員会での審議内容が紹介され、地区会としての対応が承認された。
 - ・地区会の開催日程について、審議内容が紹介され、地区会活性化ワーキンググループが検討を続けることとなった。
 - ・2013年度予算案が、微修正の上、承認された。
 - ・次回地区大会を青森県で開催することが了承された。

関東地区会

2013年(1月—12月)活動報告

- (1) 本年度から地区会事務局がつくば地区(国立環境研究所、農業環境技術研究所、森林総合研究所)から東京地区(玉川大学)の担当となった。
- (2) 2013年1月12日(土)に秋葉原ダイビルにおいて、関東地区会公開シンポジウムを開催した。
テーマ:生態学者の研究留学
主催:日本生態学会関東地区会
企画:杉浦真治(森林総合研究所)・楠本良延(農業環境技術研究所)
世界的に自国以外での高等教育・研究機関で学ぶ学生が増え続けている。また、国内で学位を取得後に国外の研究機関でキャリアを積まれる方も増えている。生態学分野も例外ではない。本地区会シンポジウムでは、わが国で活躍しておられる海外での留学経験をお持ちの研究者、また、日本に留学されている研究者に、自国以外での留学体験や研究留学することのメリット・デメリットについて話題提供していただいた。

【プログラム】

- 1) 杉浦真治(森林総合研究所):趣旨説明
 - 2) 石井博(富山大学):海外での研究紹介:カナダで行った/ニュージーランドで行っている送粉生態学研究
 - 3) 森章(横浜国立大学):研究留学することのメリット・デメリット
 - 4) デービッド・ヘンブリー(京都大学):進化生態学の研究留学のためアメリカから日本に来て学んだこと
 - 5) 総合討論
- (3) 2013年1月12日(土)に、上記シンポジウムの会場にて役員会および総会を開催した。総会では2012年活動報告・会計報告、2013年予算案が審議され、地区会事務局の異動と新旧役員の交代が確認された。
- (4) 2013年3月2日(土)に東京海洋大学品川キャンパス白鷺館において、第33回関東地区生態学関係修士論文発表会を開催した。
主催:日本生態学会関東地区会
実行委員:代表 宮川尚子(東京海洋大)、香川幸太郎(東邦大)、下川悟史(首都大)、鈴木美季(筑波大)、田中裕一、安木奈津美(東京大)

【発表一覧】

「伊豆諸島におけるサクユリの遺伝的多様性」山本将(明治大)
「生存戦略としてのアメリカザリガニ(*Procambarus clarkii*)の共食い」中村隆宏(東京大)
「節足動物の行動に対するカンタリジン(テルペノイド)の多機能性」橋本晃生(首都大)
「大きな有限個体群を対象とする進化ゲームに関する進化的安定性と侵入可能性」高橋弘明(筑波大)
「HEPを用いたダム撤去事業における野生生物生息地の定量的影響評価—球磨川水系荒瀬ダムをケーススタディとして—」八木裕人(東京都市大)
「気候学的・生理生態学的要素がマラリア媒介蚊各種の時空間的な分布に与える影響」加我拓巳(早稲田大)

- 「北西太平洋深海熱水噴出域に生息するオハラエビ類の生物地理学および集団遺伝学的研究」矢萩拓也(東京大)
「太平洋貧栄養海域における微生物群集構造の解析」鈴木翔太郎(東京大)
「西部北太平洋におけるカツオの北上回遊」大里和輝(東京大)
「Population fluctuation of the Pacific krill *Euhausia pacifica* off north eastern Honshu, Japan」本間洋一郎(東京大)
「北太平洋産イワシクジラ生物学的特性値の中長期的変動」石川雄一郎(東京海洋大)
「沖縄海域におけるザトウクジラの集団遺伝学的特性」堤太一(東京海洋大)
「日本沿岸域におけるミンククジラ分布特性の解明—リモートセンシングによる海洋環境との比較—」北山和也(東京海洋大)
「都市化とチョウ類幼虫—捕食寄生者系」阪根浩平(横浜国立大学)
「マツ材線虫病がマツ林の昆虫・線虫相に与える影響」清水愛(東京大)
「氷期の遺存種であるハイマツと共生する外生菌根菌群集」横川諒(東京大)
「根子岳におけるレンゲツツジと根内共生菌の関係」高橋宏瑛(筑波大)
「盗蜜者がもたらすオオバギボウシへのマルハナバチの訪花行動の変化」山田歩(東邦大)
「さとやま自然再生事業地におけるニホンミツバチの花資源利用と送粉の季節的パターン」藤原愛弓(東京大)
「冷温帯コナラ林およびアカマツ林におけるリター層含水比連続測定とリター層呼吸の制御要因」増田莉菜(早稲田大)
「冷温帯落葉広葉樹林における土壌表面からのCO₂放出量の推定—トレンチ法を用いた土壌生物呼吸と根呼吸の連続測定—」安西理(早稲田大)
「葉の形態と光合成に着目した高山植物の低圧環境への応答」早川恵里奈(筑波大)
「山地帯における常緑広葉樹ツヨゴの光合成活性の季節変化」木村一也(東邦大)
「太平洋型ブナ林を主とするブナ属2種の種子食性小蛾類相」山路貴大(宇都宮大)
「環境の異なる路傍植生における群落構造と外来植物出現の関係」紺野由佳(茨城大)
「マレーシアエンダウロンピン国立公園における外来植物アメリカクサノボタンの分布に影響を与える要因」福盛浩介(首都大)
- (5) 2013年3月31日に地区会会報第61号を発行した。内容は公開シンポジウム「生態学者の研究留学」および「Hierarchical modeling for the environmental sciences」の特集および、第32回関東地区生態学関係修士論文発表会の報告、および地区会の活動記録・会計報告である。
- (6) 2013年5月21日(月)に東京大学において、関東

地区会公開シンポジウムを開催した。

テーマ：環境変動下の生物多様性と生態系機能

主催：日本生態学会関東地区会

企画：森章（横浜国立大学）・佐々木雄大（東京大学）
生命科学の主たるテーマとして、地球上にはなぜ生命の多様性があるのか、そして、生命の多様性にはどのような意味があるのかを解き明かすことが挙げられる。これらの問いに関連して、近年では、生物多様性が生態系の機能性やサービスをどのように支えているのかについての関心が高まっている。本地区会シンポジウムでは、環境変動に伴い生物多様性がどのように改変されるのか、そして、多様性の変化が生態系の機能性にどのような影響をもたらすのかについて最新の研究例を紹介した。海外からの演者は、北米とアジアの草地生態系を対象に、多様性—機能性 (biodiversity-ecosystem functioning) に係る実証研究を実施してきた。長期研究により得られた知見をもとに、今後の多様性研究の展望について議論した。

【プログラム】

- 1) 概要説明
- 2) Dr. Yu Yoshihara (Tohoku University, Japan) 「放牧地における植物や動物の種数の増加は生態系サービスを向上する (Increasing the number of species richness of plant and animal in grazed lands improves pastoral ecosystem services)」
- 3) Dr. Yongfei Bai (Chinese Academy of Sciences, China) 「気候変動に対する草地生態系の応答：モンゴル高原における実証研究 (Responses of grassland ecosystems to climate change: Evidence from Mongolia Plateau)」
- 4) Dr. Forest Isbell (University of Minnesota, USA) 「植物多様性が変化した要因とその結果：多様性—機能性の長期観測より (Causes and consequences of changes in plant diversity)」
- 5) 総合討論

中部地区会

- (1) 平成 24 年度 (2012 年度) 中部地区会講演会及び総会を開催

開催日：平成 25 年 2 月 11 日、会場：グランシップ静岡
第 60 回日本生態学会大会 (静岡大会) 開催にともない、2012 年度は例年行っている研究発表大会を開催せず、講演会及び総会のみを開催した。総会では、大会の準備等に関して詳細な打合せを行った。講演会の内容は次のとおりである。

「火入れの植生に対する生態学的影響」津田智 (岐阜大学流域圏科学研究センター)

- (2) 平成 25 年度 (2013 年度) 中部地区会大会及び総会を開催

開催日時：平成 25 年 11 月 30 日 13:00 ~ 17:00、

会場：富山大学理学部

地区会事務局が静岡大学から富山大学に移り、総会及び大会を行った。総会の出席者及び主な審議事項は次のとおりである。

- ・出席者：津田智・小南陽亮・山下寿之・井田秀行・宮崎智史・石井博・横畑泰志・和田直也 (以上 8 名)
 - ・任期満了にともなう次期の地区会選出自然保護専門委員について、交替希望のあった井田秀行氏に替わり須賀丈氏 (長野県環境保全研究所) を選出した。
 - ・これまで作成されていなかった中部地区会の会則案が地区会事務局から提示された。審議の結果、一部修正の上、同日付けで中部地区会会則が制定された。なお、会費については、従来通り、当面の間徴収しないことになった。
 - ・中部地区会の活動を活性化するため、大学院生や若手研究者等を対象とした研究助成制度案が地区会事務局から提示された。審議の結果、一部修正の上、次年度より実施することになった。
 - ・次回の中部地区会大会について、開催候補地を今後検討することとなった。
 - ・会計担当の石井氏より、平成 25 年 4 月 1 日より現在までの会計報告があった。
総会終了後、研究発表会が行われた。参加者は 39 名であり、27 題のポスター発表があった。発表プログラムは以下のとおりである。
- 1) 「標高傾度に沿ったシダ植物の種多様性」田中崇行 (信州大学・院・総合工)・佐藤利幸 (信州大学・理学部)
 - 2) 「大佐渡山地におけるシダ植物の分布とそれを規定する環境要因について」大杉周 (新潟大大学院・自然科学研究科)・本間航介 (新潟大・農学部)
 - 3) 「山梨県におけるシダ植物新規出現種とその分布域推移の方向性」松浦亮介 (信州大・院・総工)・佐藤利幸 (信州大・理、信州大・院・総工)
 - 4) 「北アルプス立山のハイマツ群落におけるリターフール量の長期モニタリング」立島健 (富山大院・理工学教育部)・和田直也 (富山大・極東地域研究センター)
 - 5) 「長野県小谷村の伝統的カヤ場において火入れがカヤの品質に与える効果」小谷一央 (信州大・教育学部)・井田秀行 (信州大・志賀自然教育研/山岳総研)
 - 6) 「ハイマツ当年枝の伸長生長と針葉量の関係」井上洋介 (富山大・理学部)・和田直也 (富山大・極東地域研究センター)
 - 7) 「チベット南部域における *Meconopsis horridula* の遺伝的多様性」梅本奈美・森高子 (中部大・応用生物)・村上哲生 (名古屋女子大・家政学部)・朱立平 (中国科学院・青藏高原研究所)・松中哲也・西村弥亜 (東海大・海洋学部)・南基泰 (中部大・応用生物)
 - 8) 「立山地獄谷周辺に生育するハイマツの生存状況と火山性ガスによる影響評価」松田大地 (富山大・理)・和田直也 (富山大・極東地域研究センター)
 - 9) 「春植物カタクリの開花フェノロジーに影響を及ぼす諸要因の検討」宮崎貴文 (富山大・理)・和田直也 (富山大・極東地域研究センター)
 - 10) 「宿主 *Anopheles stephensi* と寄生者 *Plasmodium* の関係」内田結 (金沢大・理工学域)
 - 11) 「小規模島嶼におけるアズマモグラ (*Mogera*

- imaizumii*) の腸管寄生性蠕虫類の種多様性の減少」井出哲哉(富山大・理)・石田寛明・横畑泰志(富山大・院・理工)・阿部永(元北海道大・農)・土橋明晃(山形県立山形南高)
- 12) 「双翅目昆虫成虫による摂食が菌類胞子に与える影響の解明」小林美緒(金沢大・自然システム学類)・都野展子(金沢大・自然システム学類)
- 13) 「地衣体の三次元構造に基づく樹幹着生地衣群落-節足動物群集系の構造解析-生態系エンジニアとしての地衣類」池田彬人(信州大・理工学系研究科)・佐藤利幸(信州大・理・生物科学)
- 14) 「テングタケ属キノコにおける双翅目昆虫のキノコ利用パターンの解明」新田真之(金沢大学大学院自然科学研究科)
- 15) 「中部山岳国立公園立山におけるマルハナバチ各種の花資源利用スケジュール: 3標高帯の比較」中村友香・居村尚・久保田将裕・増田光・石井博(富山大・理学部)
- 16) 「福島第一原発事故によるアズマモグラ (*Mogera imaizumii*) への放射性物質の影響(予報)」武田沙千愛・山中潤一(富山大・理)・横畑泰志・丸茂克美(富山大・院・理工)・廣上清一(富山大・放射性同位元素実験施設)
- 17) 「愛知県知多半島臨海工業地帯企業緑地におけるシャーマントラップによる小型哺乳類捕獲調査」鬼頭宣行・金山和樹・和嶋祐己(中部大・応用生物学部)・川本宏和・白子智康・上野薫・南基泰(中部大院・応用生物学研究科)・江口英顕(JX日鉱日石エネルギー(株)知多製造所)・山本明宏(中部電力(株)知多火力発電所)・橋本良樹(出光興産(株)愛知製油所)・藤森誠司(東邦ガス(株)知多緑浜工場)
- 18) 「野外におけるコウベモグラ (*Mogera wogura*) に対する生薬抽出残渣の忌避効果の検討例」上林史弥(富山大・理)・荒井志穂・安田暁・横畑泰志(富山大・院・理工)
- 19) 「愛知県知多半島臨海工業地帯企業緑地におけるカメラトラップ法による中型哺乳類相調査」和嶋祐己・金山和樹・鬼頭宣行(中部大・応用生物学部)・川本宏和・白子智康・上野薫・南基泰(中部大院・応用生物学研究科)・江口英顕(JX日鉱日石エネルギー(株)知多製造所)・山本明宏(中部電力(株)知多火力発電所)・橋本良樹(出光興産(株)愛知製油所)・藤森誠司(東邦ガス(株)知多緑浜工場)
- 20) 「岐阜県南部の農地におけるコウベモグラの活動周期」荒井志穂・石田寛明・安田暁・横畑泰志(富山大・院・理工)・上林史弥(富山大・理)
- 21) 「出光興産(株)愛知製油所における哺乳類の企業活動への影響評価」川本宏和(中部大院・応用生物学研究科)・金山和樹・鬼頭宣行・和嶋祐己(中部大・応用生物学部)・白子智康・上野薫・南基泰(中部大院・応用生物学研究科)・橋本良樹(出光興産(株)愛知製油所)
- 22) 「岐阜県南部の平地におけるコウベモグラの巣2例の発掘」横畑泰志・荒井志穂(富山大・院・理工)・上林史弥(富山大・理)
- 23) 「ヴェトナム・カッティエン国立公園で捕獲されたネズミ科のDNAバーコーディング法を用いた餌資源調査」白子智康・石澤祐介(中部大院・応用生物学)・味岡ゆい(中部大・現代教育)・上野薫(中部大院・応用生物学)・Do Tan Hoa・Bach Thanh Hai・Tran Van Thanh (Cat Tien National Park)・山田祐彰(東農大院・農学)・南基泰(中部大院・応用生物学)
- 24) 「性比からみた富山県産イノシシ (*Sus scrofa*) の分布拡大」安田暁(富山大・院・理工学教育部)・横畑泰志(富山大・院・理工学研究部)
- 25) 「金沢市郊外の放置里山における中大型哺乳類相の確認と、石川県ニホンカモシカの糞採取データによる空間分布モデル・地理系統解析」渡邊和哉(金沢大学大学院自然科学研究科)
- 26) 「土岐川・庄内川源流 森の健康診断5年間の結果」佐竹利規・望月陽佑・前田大樹・上野薫・愛知真木子(中部大・応用生物学部)・杉井俊夫(中部大・工学部)・南基泰・寺井久慈(中部大・応用生物学部)・服部重昭(名古屋大・農学部)
- 27) 「積雪表面の色彩測定と画像解析による火山性ガスの影響評価に関する研究」佐澤和人(富山大・極東地域研究センター)・菅野智寛(富山大・院・理工学教育部)・倉光英樹(富山大・院・理工学研究部)・和田直也(富山大・極東地域研究センター)
- ポスター賞に応募のあった24名中、次に示す4名が「優秀ポスター賞」に選ばれ、表彰が行われた。
- 田中崇行(信州大・院・総合工)
梅本奈美(中部大・応用生物)
内田結(金沢大・理工学域)
池田彬人(信州大・院・理工学系研究科)
- 以上

近畿地区会

- (1) 2013年度第1回地区会委員会
日時: 2013年6月15日(土)
会場: 大阪府立大学中百舌鳥キャンパス
議事: 1) 2013年度事業計画案: 公募集会の募集、第2回地区会例会 2) 2012年度会計報告と2013年度会計予算案 3) 日本生態学会法人化に伴う地区会の対応 4) 次期会長候補の選出 5) 近畿地区会第15回奨励賞の選考
- (2) 2013年度近畿地区会総会
日時: 2013年6月15日(土)
会場: 大阪府立大学中百舌鳥キャンパス
議事: 1) 2013年度事業計画案 2) 2012年度会計報告と2013年度会計予算案 3) 日本生態学会法人化に伴う地区会の対応 4) 中池見湿地の保全に関する要望書の提出
- (3) 2013年度第1回例会
日時: 2013年6月15日(土)
会場: 大阪府立大学中百舌鳥キャンパス
第15回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式(西田

圭佑氏、小山耕平氏)

一般発表

- 1) 「都市にハマツメクサが侵入?—アンケート調査依頼—」藤井俊夫(人と自然の博物館)・長谷川匡弘(大阪市立自然史博物館)・プロジェクトU植物班(大阪市立自然史博物館)
 - 2) 「魚類における認知能力と社会性の関係」堀田崇・幸田正典(大阪市大・院理・生物地球)
 - 3) 「小笠原・乾性低木林における樹木の乾燥ストレス耐性とその生理機構」奥野匡哉・才木真太郎(京大生態研)・吉村謙一(森林総研)・中野隆志(山梨県環境科学研究所)・矢崎健一(森林総研)・石田厚(京大生態研)
 - 4) 「水生昆虫群集の初期遷移パターンに関する研究」鈴木真裕・平井規央・石井実(大阪府大・生環・昆虫)
 - 5) 「三次元マッピング法による高木上の着生植物のバイオマス推定と空間分布解析」中西晃(京大院農)・Witchaphart Sungpalee・Kriangsak Sri-ngernyuang(Maejo 大学)・神崎護(京大院農)
 - 6) 「乾燥勾配に沿ったテリハハマボウの乾燥適応：形態的特性と生理特性の変化」才木真太郎・奥野匡哉(京大生態研)・吉村謙一・矢崎健一(森林総研)・中野隆志(山梨県環境科学研究所)・石田厚(京大生態研)
 - 7) 「リン施用は *Acacia mangium* 植林地土壌からの N₂O 放出を抑制できるのか？」森大喜・太田誠一(京大院農)・石塚成宏(森林総研)・根田遼太(京大院農)・Wicaksono Agus・Heriyanto Joko・Arisman Hardjono(MHP)
- (4) 2013 年度「公募集会」の選考
公募集会の募集を 6 月 28 日 - 7 月 31 日に行い、応募のあった公募集会 3 件について選考委員会による選考の後、近畿地区委員会に選考結果を諮り、8 月 26 日付で公募集会 3 件への助成が承認された。
- (5) 2013 年度第 2 回地区会委員会・例会(予定)
日時：2013 年 12 月 14 日(土)
会場：京大学生態学研究中心
- 1) 地区会委員会
 - 2) 第 16 回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式(奥野匡哉氏、中西晃氏)
 - 3) 例会(一般発表；題未定)

中国四国地区会

(1) 第 57 回中国四国地区大会(2013 年 5 月 11, 12 日、於：徳島大学)

【ポスター発表】(5 月 11 日)

「徳島県における竹林拡大予測」荒井祐作¹、竹村紫苑²、
○鎌田磨人³(¹ 徳島大・工、² 徳島大・院・建設創造システム、³ 徳島大・院・ソシオテクノサイエンス)
「三面分布図と GIS を活用したコケ植物における分布要因の推定(予報) - ミズゴケ類の事例」○久保晴盛¹、
向井誠二^{2,3}、坪田博美^{1,3}(¹ 広島大・院・理学研究科、² 広島大・技術センター、³ 広島大・宮島自然植物実験所)
「山口県島田川河口砂州の地形変化が海浜植物の分布

に及ぼす影響」○二神良太、岡浩平(広島工業大・院・工学系研究科)

「宮島におけるシリブカガシ個体群の存続可能性」○倉岡優(広島大・院・総合科学研究科)

「岡山県旭川の河道内に生育する樹木の生態学的研究」
○太田謙¹、波田善夫²、堀博幸³、清水信夫³(¹ 加計学園自然植物園、² 岡山理科大生物地球、³ 岡山河川事務所)

「常緑樹と落葉樹の高 CO₂ 応答」○高岡侑依子¹、彦坂幸毅²、廣瀬忠樹³、衣笠利彦¹(¹ 鳥取大・院・農、² 東北大・院・生命科学、³ 東京農大・国際食料情報)

「モンゴル草原に生育する低嗜好性雑草 *Artemisia adamsii* の種子発芽能力」○石橋京子、衣笠利彦(鳥取大・農学部)

「モンゴル草原における干ばつ後の遷移初期種の発芽の光要求性と温度依存性」○穂積由実、西嶋遥、衣笠利彦(鳥取大・農学部)

「モンゴル草原の丘陵における植生と埋土種子相」○仲康朗、衣笠利彦(鳥取大・農学部)

「モウコガゼルの移動パターンの類型化」○今井駿輔¹、伊藤健彦²、衣笠利彦¹、恒川篤史²、篠田雅人²、B. Lhagvasuren³(¹ 鳥取大・農学部、² 鳥取大・乾燥地研究センター、³ モンゴル科学アカデミー)

「山口県におけるツキノワグマ目撃情報の整理」○中村朋樹¹、細井栄嗣²、田戸裕之³(¹ 山口大・院・農学研究科、² 山口大・農学部、³ 山口県農林総合技術センター)

「ニホンアカザトウムシの形態学および系統学的研究」○糸川義雅¹、伊藤桂¹、早川宗志²、三浦収³、横山潤⁴、荒川良¹、福田達哉¹(¹ 高知大・院・総合人間自然科学、²(独) 農環研、³ 高知大・総合研究センター、⁴ 山形大・理・生物)

「世界遺産・知床の冷水性サケ科魚類を脅かす水温上昇の現状 - ダムは水温上昇を加速させるのか -」○竹川有哉¹、河口洋一²、谷口義則³(¹ 徳島大・院・先端技術科学教育部、² 徳島大・院・ソシオテクノサイエンス、³ 名城大・理工)

「日本産メダカ属における体色斑紋の比較」○松尾扶美¹、川瀬成吾²、久保計喜³、細谷和海³(¹ 徳島大学・院・ソシオテクノサイエンス、² 近畿大・院・農、³ 近畿大・農)

【口頭発表】(5 月 12 日)

「空間解像度の異なる二年代の植生図を用いた土地利用変化の把握手法」○中西裕也¹・鎌田磨人²(¹ 徳島大・院・建設創造システム、² 徳島大・院・ソシオテクノサイエンス)

「水生植物の個体群動態のパターンは各種の生活型と密接に関連する：4 年間の継続調査結果」○山ノ内崇志、石川慎吾(高知大・院・総合人間自然環境科学)

「剣山系稜線部のササ草原およびウラジロモミ林、シラビソ林におよぼすニホンジカの影響」堀澤凌甫、○石川慎吾(高知大・理学部)

「企業の CSR 活動としての育林・森林整備活動の現状と課題」阪口恵理、○中越信和(広島大・院・国際協力)
「標本と文献に基づく鳥取県内シダ植物リストの整理」

○永松大¹、佐藤沙紀¹、有川智己²、米澤朋子²、田中昭彦² (¹鳥取大・地域、²鳥取県立博物館)

「讃岐山脈におけるアカサビザトウムシの染色体数の地理的分化と環状重複」○鶴崎展巨、佐藤隼斗 (鳥取大・地域学部生物)

「造成から6年たつ人工干潟は既存干潟を代償できたか？」○中河哲郎¹、山本龍兵¹、東和之²、大田直友³ (阿南高専・¹専攻科、²技術部、³建設システム工学科)

【高校生研究発表】(5月11日)

【公開シンポジウム】(5月11日)

「使って守る生物多様性」(コーディネーター：鎌田磨人)

「棚田の多様な植物と利用の知恵」松井宏光 (松山東雲短期大学名誉教授)

「火入れで守る草原の生物多様性と地域文化」白川勝信 (北広島町立芸北高原の自然館)

「ルイスハンミョウと共存する浜 ー人工海浜での新たな利用と仕組み」大田直友¹、大塚弘之² (沖洲海浜楽しむ会/¹阿南高専、²徳島県県土整備部)

【総会】(5月12日)

a. 報告事項

庶務報告

地区会員の動向 (2012年12月末現在302名、昨年度-12名)、会費納入率、活動報告

会計報告 2012年度会計

日本生態学会第60回大会総会報告

日本生態学会法人化について

要望書 (湖山池の変化にともなうカラスガいの保全に関する緊急要請) について

2014年日本生態学会第61回大会広島大会について

b. 承認事項

2012年度会計決算

2014年度合同支部大会開催地：岡山

c. 審議事項

2013年度会計予算

2015年度合同支部大会開催地：愛媛

地区会次期会長選挙について

九州地区会活動報告

(1) 2012年度地区委員会

2012年5月19日(土) 佐賀大学農学部

(2) 地区大会

第57回三学会九州支部・地区合同大会

会期：2012年5月19日(土)～20日(日)

会場：佐賀大学農学部

【ポスター発表】

「変形菌モジホコリカビはどのような特徴のある餌を好んで食べるのか」*堀田愛美 (早稲田佐賀高・2年)・大石珠央 (早稲田佐賀高・3年)・安元暁子 (早稲田佐賀高・教諭)

「自殖か他殖か、それが問題だ！ー母親種が自殖種だと雑種形成が起きやすくなる？ー」*安元暁子 (早稲田佐賀高校)・岩永廣子 (岡山朝日高校)・清水理恵 (チューリヒ大・植物)・工藤洋 (京大・生態研)・清水健

太郎 (チューリヒ大・植物)

「メダケ (*Pleioblastus simonii*) 林の林分構造と地上現存量」*田中亚輝子 (東海大院・農)・伊藤秀一・梶田聖孝・岡本智伸 (東海大・農)

「半自然草地における放牧利用の停止が植生の空間変動に及ぼす影響」*岡本智伸・田中亚輝子・伊藤秀一・プラダン ラジブ・梶田聖孝 (東海大・農)

「イヌビワの“メス”の木におけるイヌビワコバチの再潜入/授粉の効果」木下智章 (佐賀大・農)

「ヒカゲスゲ、モエギスゲの種子を散布するアリの個体数と種構成の季節変化：長距離散布と散布種子数のトレードオフ？」*田中弘毅 (鹿児島連大)・鈴木信彦 (佐大・農)

「植食者とアリ群集の違いに応じたアカメガシワの資源配分戦略」*山尾僚 (佐大・農)・鈴木信彦 (佐大・農)

「アリ随伴性アブラムシがムラサキシジミの産卵場所選好性におよぼす影響」*大橋英純・末松俊二・徳田誠・鈴木信彦 (佐大・農)

「オオズアリのメジャーワーカーにおける採餌と栄養貯蔵、および表現型可塑性」*横田智 (佐大・農)・山尾僚 (佐大・農)・鈴木信彦 (佐大・農)

「ヨツボシモンシデムシの雄の給餌について」*岸田竜 (佐大農)・野間口眞太郎 (佐大農)

「ベニツチカメムシの母親による給餌音」*野間口眞太郎・高比良綾子・柳孝夫 (佐賀大)・馬場成美 (九州大)・弘中満太郎 (浜松医科大)・Lisa Filippi (Hofstra Univ.)

「フタバシツチカメムシの雌親は振動により同調孵化を誘導する」*向井裕美 (鹿大・連合農学)・弘中満太郎 (浜松医科大・生物)・藤條純夫 (佐大・農)・野間口眞太郎 (佐大・農)

「フタテンチビヨコバイの九州東岸および四国からの発見とゴール形成能力の地域間変異」*神代瞬 (鹿児島連大)・松倉啓一郎 (九州沖縄農研)・松村正哉 (九州沖縄農研)・徳田誠 (佐大・農)

「フタテンチビヨコバイ吸汁時のトウモロコシにおける植物ホルモンと含水率の変動」*徳田誠 (佐大・農)・軸丸裕介 (理研PSC)・松倉啓一郎 (九州沖縄農研)・神代瞬 (鹿児島連大)・松村正哉 (九州沖縄農研)・神谷勇治 (理研PSC)

「異なる発育段階のトノサマバッタ幼虫にオオムギを摂食させた場合の生存と発育」*末松俊二・徳田誠 (佐大・農)

「ニホントカゲの日光浴による体温上昇に影響をもたらす要因」*原田龍一 (佐賀大農)・野間口眞太郎 (佐賀大農)

「岩礁潮間帯における植食性軟体動物の摂餌生態にみられる種間差」*豊西敬・山本智子 (鹿児島大・水産)「大規模工事の終了後における糞からみたテンの生息状況」*荒井秋晴 (九歯大・総合教育)・足立高行・桑原佳子 (応用生態研)

【口頭発表】

「シナサワグルミ果実の翼の輪郭形状の落下速度への影響」*井出純哉 (久工大・工・教育)・後藤麻美 (久

工大・工・教育)

「蜜の新たな利用法～ヤッコソウの種子散布の報酬として～」* 三原菜美・川口莉奈・矢原徹一 (九州大学・生態科学研究室)・田川哲 (屋久島世界遺産センター)「伊都キャンパス林床移植地におけるポリネーションネットワーク」* 寺本健太郎 (九大・生態研)・矢原徹一 (九大・生態研)

「熊本県における小型樹上性哺乳類の調査—巣箱自動撮影法のすすめ—」* 坂田拓司 (千原台高)・安田雅俊 (森林総研九州支所)・長峰智 (熊野研)・田上弘隆 (開新高)・天野守哉 (熊本県文化企画課)

「沖永良部島におけるオリオオコウモリ *Pteropus dasymallus inopinatus* 生息の初記録」* 船越公威 (鹿児島国際大・国際文化)・大沢夕志・大沢啓子 (コウモリの会)

「外来種カササギの営巣場所選択—侵入初期の苦小牧周辺地域における現状把握—」* 中原 亨 (九大・生態研)・長谷川理 (エコ・ネットワーク)・森さやか (科博・分子生物)・早矢仕有子 (札幌大・法)・江口和洋 (九大・生態研)

「ハシボソガラスにおける餌落とし行動の季節変化」森田詩織 (九大院・システム生命学府)・* 江口和洋 (九大院・理・生物)

「宮崎県日南市に移入・定着したオキナワキノボリトカゲの分布範囲及び生息状況について」* 岩本俊孝・貴島靖仁・永田篤教・芳野香織 (宮崎大・教文・生物)・那須哲夫・武市知美 (宮崎大・農・獣医)・森田哲夫・加藤悟郎 (宮崎大・農・畜産)・星野一三雄 (日向学院高)・末吉豊文 (高千穂中)・太田正利 (兵庫県立大・自然・環境科学)

「大村湾のスナメリは針尾瀬戸を通過するのか? 遺伝学的アプローチ」* 會津光博 (九大・比文)・西田伸 (九大・比文)・楠見淳子 (九大・比文)・天野雅男 (長大・水産)・荒谷邦雄 (九大・比文)

「マングローブ樹木種オヒルギの遺伝的変異と集団構造」* 浦志知恵・美濃部純子・小泉修・猪股伸幸 (福岡女子大学・人間環境)

(3) 地区例会 (生態学会話題提供のみ)

第 499 回 12 月 17 日 (月) 沖縄 (琉球大学)

井鷲裕司 (京都大学大学院農学研究科森林生物学研究室)

「全個体遺伝解析による絶滅危惧種の保全」

※この例会については、6 月 2 日に沖縄生物学会と共催で、三学会の合同例会として開催されたが、実施前にプログラム等の案内が無く、会員への周知がなされていないことから、例会が実施されたとは認められず、12 月の例会を三学会合同例会の代替開催とした。

第 500 回 7 月 7 日 (土) 鹿児島 (鹿児島大学郡元キャンパス)

シンポジウム「奄美群島の生物多様性」

主催：鹿児島大学 (鹿児島環境学研究会・奄美プロジェクト)

同時開催：三学会 (生態学会・動物学会・植物学会の各支部) 合同例会

【プログラム】

挨拶：吉田浩己 (鹿児島大学学長)

1. 趣旨説明：岡野隆宏 (鹿児島大学)

2. 話題提供

1) 「沖縄やんばるの森からみた奄美大島の森林生態系：固有動物と外来種問題について」小高信彦 (森林総合研究所九州支所)

2) 「徳之島の森林生態系：自然・人為攪乱による特性と危機」米田健 (鹿児島大学)

3) 「奄美群島の昆虫相」山根正気 (鹿児島大学)

4) 「奄美群島の植物相、その虚と実」宮本句子 (鹿児島大学)

5) 「大隅諸島～奄美群島の非海産貝類 (陸産貝類 + 淡水産貝類)」富山清升 (鹿児島大学)

6) 「九州南部～奄美群島の陸産・淡水産カニ類」鈴木廣志 (鹿児島大学)

7) 「鹿児島県生物多様性戦略の策定とレッドデータブックの改訂」則久雅司 (鹿児島県自然保護課)

3. 総合討論

(同日開催)「生物多様性国家戦略の改定に係る地方説明会 in 鹿児島」

第 501 回 11 月 10 日 (土) 熊本 (熊本大学理学部)

「潮間帯水槽を用いたタイドプール魚類群集の空間利用解析」新垣誠司 (九州大・理・天草臨海)

第 502 回 11 月 10 日 (土) 宮崎 (宮崎大学教育文化部)

1. 「カブトガニ日本集団の遺伝的構造および寄生性ウズムシとの比較系統地理の試み」西田伸 (宮崎大学教育文化学部)

2. 「一本の木になるドングリは均質か? —種子形質のばらつきと種子の生存過程の関係—」高橋明子 (京都大学野生動物研究センター幸島観察所)

第 503 回 12 月 8 日 (土) 福岡 (九州大学 21 世紀研究交流プラザⅡ)

「生物の宝庫ニューカレドニア～南の島のいきものたち～」中原亨 (九大・システム生命学府)

第 504 回 12 月 8 日 (土) 鹿児島 (鹿児島大学理学部)

(コア SSH 研究会と合同開催)

【特別講演】

「国立公園に指定された海底とサツマハオリムシ」大木公彦 (鹿児島大学名誉教授)

【高校生によるポスター発表】

A11. 錦江湾高等学校生物研究部「指宿市鰻池産オオクチバスに被食された甲殻類：種組成とスジエビの体サイズ」

A12. 池田高等学校 SSH 課題研究生物班「港のアリ—外来アリのモニタリング—」

A13. 国分高等学校水質班「環境要因と植物プランクトンの発生との関係性について」

A14. 鹿児島玉龍高等学校サイエンス部「マーキングから見る季節移動 —イチモンジセセリの謎を追う—」

A15. 鹿児島中央高校「ゼニゴケの観察」

B12. 池田高等学校 SSH 課題研究生物班「地域を生かした DNA 抽出と PCR」

B13. 指宿高等学校物理化学部「カブトムシの幼虫に関

する研究」

B14. 錦江湾高等学校生物研究部「お茶に害を与える昆虫」

B15. 志布志高等学校自然科学研究部「志布志高校に潜む蟹の様相と環境との関係について」

【鹿児島県内の高校生による課題研究口頭発表—鹿児島県高校理科部会推薦】

1. 鹿児島県立錦江湾高等学校「指宿市鰻池におけるスジエビ（テナガエビ科）の繁殖と成長」
2. 鹿児島県立国分高等学校「黒島産ミヤマクワガタはクロシマミヤマクワガタか？」

第 505 回 12 月 15 日（土）長崎（長崎大学水産学部）

1. 「長崎県産葉上苔類（カビゴケ）の生態」○矢野元^a・中西こずえ^b（^a長崎大学環境科学部；^b長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科）
2. 「長崎県南部のヨシ群落」○白濱一之心^a・中西こずえ^b（^a長崎大学環境科学部；^b長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科）
3. 「ロウソクギンボ保護雄の全卵食行動：性ホルモンの制御された繁殖サイクルに着目して」松本有記雄^a・立石哲済^b・征矢野清^a・○竹垣毅^a（^a長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科；^b長崎大学水産学部）
4. 「幼生輸送を介した巻貝（イボキサゴ）局所個体群の連結性—数値流動モデルに基づいた天草の干潟保護区の提案」○中野 善^a・竹内清治^b・本郷友一朗^b・玉置昭夫^b（^a長崎大学大学院生産科学研究科；^b長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科）
5. 「軍艦島（端島）の植生と植物」○中西弘樹・岸本佑也（長崎大学教育学部）

第 506 回 12 月 16 日（日）大分（大分大学教養教育棟）

1. 「乙津川における塩湿地植生の再生（中間報告）」○須股博信・工藤敦子・荒巻信子・足立陽子（大分生物談話会）
2. 「高崎山ニホンザル群における「石遊び」の研究 II」大分県立大分舞鶴高等学校
3. 「院内町のオオサンショウウオの生態について」大分県立安心院高等学校

※第 507 回の佐賀例会は、5 月開催の合同大会が例会を兼ねることになり、開催されませんでした。

(4) 地区会報 62、63 号発行

(5) 役員選挙

お知らせ

1. 第 34 回（2014 年）関東地区生態学関係修士論文発表会

毎年恒例の生態学関係修士論文発表会を、下記の通り、明治大学にて開催いたします。この発表会は、本年度生態学関係の修士課程を修了される大学院生の皆さまに、その研究成果を発表する機会を提供するものです。本発表会では日本生態学会関東地区会の会員・非会員に限らず発表でき、毎年さまざまな分野の大学院生が成果を披露しております。また本会は、30 年以上にわたり、幅広い生態学研究的交流や、学生同士の意見交換、ネット

ワーク作りに役立ってきました。今年度も多くの方々に参加して頂きたいと考えておりますので、皆様には周囲の大学院生への周知をお願い致します。併せて、当日のご来聴を心よりお待ちしております。

※申込み方法などの詳細につきましては、下記のウェブサイトをご覧ください。

(<http://ecologykantomaster2014.web.fc2.com/>)

主催：日本生態学会関東地区会

日時：2014 年 3 月 1 日（土）09:00～（発表終了後懇親会）
会場：明治大学 駿河台キャンパス

※会場へのアクセス

(http://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/suruga/access.html)

大学構内マップ

(http://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/suruga/campus.html)

問い合わせ先：2014 年関東地区生態学関係修士論文発表会実行委員会

(ecology.kanto.master@gmail.com)

2014 年実行委員

代表：山本 将（明治大）

委員：加我 拓巳（早稲田大）、紺野 由佳（茨城大）、橋本 晃生（首都大）、鈴木 翔太郎、藤原 愛弓、矢萩 拓也（東京大）

書評

島野智之著（2012）「ダニ・マニア」八坂書房 215pp.
ISBN:978-4-89694-143-2 定価 1900 円（税別）

かつて、日本ダニ学会の大会の懇親会で、「ダニは美しいし、かわいい。だから日本中にダニの魅力を広めるためにダニの写真集を出版しましょう。」という提案が若手を中心に出されたことがあった。当時、評者は端で聞いていて、オタクとかマニアという言葉で連想したのだが、いつの間にかこの企画は消えてしまったらしく、その後学会でダニの写真集を目にする事はなかった。

あれからどれだけの歳月が流れたかは定かではないが、ダニ写真集の代わりに、ダニの写真が盛りだくさんの啓蒙書が誕生した。タイトルは、ずばり、「ダニ・マニア」。実際の表紙のタイトルには、・のかわりにダニの絵が入っている。お茶目である。さらに、本の表紙には著者が専門にしているササラダニの緻密な絵が描かれている。

表紙をめくると、ダニのカラー写真、電顕写真が掲載されている。さらに本文へと進むと、ダニの絵と写真が次々と出てくる。どれも大変希少価値のある図と写真ばかり、総勢 150 点もあるようだ。よくぞここまで集めたものだと感心してしまう。ダニ・マニアと高らかに宣言した著者ならではのコレクションである。

そんな著者でも、前書きのところに書かれているよう

に、ここまで開き直るのにかなりの葛藤があったようだ。勤務している大学でも自分の専門がダニとはいえ、「微生物です」、とごまかしていたらしい。ところが、この本を出版することによって、著者は「世の中にカミングアウトする」決心がついたようだ。

第1章は、ダニとチーズが大好きな著者がフランス留学中に会ったチーズダニの思い出から話が始まる。さらに、著者がダニを研究対象とするようになったいきさつや、ダニにまつわるエピソードが紹介されている。

第2章では、ダニとはどんな動物かについて、分類群別に説明されている。最初は一番大きな分類群としてクモ形綱について、クモ目をはじめとしてすべての目について写真付きで解説されている。ウデムシ、コヨリムシなど珍虫の写真もしっかり掲載されている。おそらく一般向けの啓蒙書でクモとサソリを除くクモ形綱を写真付きで詳しく紹介した本は極めて少ないと思う。

次に、ダニ目の進化が解説されている。まず「ダニはどのように地上に現れたのか」、と興味深い問題が提起されている。これに関して、ダニの陸上への進出にあたって呼吸器官の発達について着目した点は興味深いが、まだ明快な回答というには至っていない感じがした。今後の研究の発展に期待したい。

さらに、ダニ目の系統と分類について説明されている。啓蒙書でダニの進化や系統について解説した本は珍しく、その点でこの本はユニークであるが、小見出しを統一してほしかった。たとえば、最初に「ダニの分類体系」について、その1から3までであるのだが、その3だけ見出しにサブタイトルがついていたり、その1と2の間に「ダニの漢字名」という見出しで解説が入っているので、すっきり読めなかった。各論の部分でも、「トゲダニ亜目その5」の後は「ケダニ亜目その1」になるのだが、途中で「トゲダニ亜目その6」についての説明がはいってきて、ハダニの説明の後に天敵のカブリダニの説明を入れた理由はわかってはやはり気になった。進化や系統の話は著者の得意とする部分であるので、もう少し整理してわかりやすく説明してほしかった。

第3章から第7章までは著者が専門にしているササラダニについて、著者のこれまでの研究成果を軸に話が展開する。第1章に、「研究試料となるダニの中でも、日本のササラダニ研究者は、プロとアマを合わせると世界中で最も多いが、ほとんどが死んだダニをプレパラート標本として観察するだけである。私はダニの本当の姿を知るためには、ダニの身体の機能、生活行動、すべてを見なければならぬ」という著者の記述があるのだが、まさしくこれらの章ではササラダニの生物学が展開する。

第3章はササラダニの各論でユニークなササラダニ達が紹介されている。フリソデ（振袖）ダニ、ドビン（土瓶）ダニ、モンツキ（紋付）ダニ。著者の言う通り、日本語の表現力を生かした和名は美しく、しかもわかりやすい。さらに、土壌のササラダニの採集法が解説されている。ダニ学者の間で有名な、オハイオ州立大学でのダニ類のサマースクールについても紹介されている。

第4章では著者によるササラダニの電顕写真と組織切

片を中心に外部・内部形態についての説明がなされる。ササラダニには目のあるものとないものがあり、さらに背中の上に目を持つ種がいることは初めて知った。また、ササラダニの餌を、緑色植物と糸状菌を分解するそれぞれの消化酵素の活性を測定することで推定するのも極めてユニークな方法である。

第5章では、他の動物から攻撃を受けやすいササラダニがどうやって外敵から防御しているかを、形態、行動、化学物質にわけて解説している。昆虫のコケムシの仲間は我々がカニを食べるときのように、ササラダニの脚の関節を狙って、そこから露出した筋肉を食べるのだそうだ。

第6章と第7章では著者の関わったササラダニのフェロモンの研究が紹介されている。普段は集合フェロモンとして仲間同士で寄り添い、さらに湿気の多い土壌中でカビから身を守るために使われる物質が、捕食者に襲われた時に警報フェロモンとして作用するらしい。さらに、ある種のササラダニは餌からアルカロイドを合成するのだが、ヤドクガエルはササラダニを食べることで毒を蓄積するそうだ。

最後の方には付録としてダニ類の体系、高次分類群の和名、ササラダニの観察法が記載されている。ササラダニの解剖法について「ダニの三枚おろし」と称して懇切丁寧な解説もある。最後にダニ学の参考書が日本語、外国語別に紹介されている。

著者の師である、青木淳一先生は日本で最初に一般向けのダニの本として「ダニの話」を書かれたが、あとがきのなかで、以下のように記している。

「結果的には、いやらしいダニの話が多くなってしまったが、これは善良なダニの研究がはるかに遅れていて、あまり紹介できるネタが多くないためである。」

「ダニの話」の初版が出版されたのが1968年であるから、その後善良なダニの研究は着実に育っていき、その成果は半世紀後に弟子にあたる著者によって「ダニ・マニア」として出版された。「ダニの話」をきっかけにダニの研究を始めた人は評者も含めて何人もいる。残念ながら「ダニの話」は現在絶版となってしまったが、これからは本書がダニの入門書である。いくつかある誤植を修正していただいて、版を重ねていてもらいたい。

（参考文献）青木淳一：ダニの話—よみもの動物記—。北隆館，東京，pp.206（1968）。

（長崎大学熱帯医学研究所病害動物室 角田隆）

湯本貴和・須賀丈編（2011）「信州の草原—その歴史をさぐる—」ほおずき書籍 178pp. ISBN:978-4-434-15541-3 定価 1,785 円（税込）

本書は総合地球環境学研究所プロジェクト「日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化的検討」（リーダー：湯本貴和）の一環として2009年に長野県諏訪市と霧ヶ峰で行われたシンポジウムに基づくものであり、その内容は以下のとおりである。

まえがき—草原と人間 湯本貴和

序 章 なぜ信州の草原なのか？ 須賀丈

- 第1章 土壌に残された野火の歴史 岡本透
- 第2章 草原と火事の歴史—阿蘇の研究から— 佐々木尚子
- 第3章 土石流により現れた縄文と古代—埋没性黒色土層— 片倉正行
- 第4章 八ヶ岳山麓・霧ヶ峰周辺における縄文・中世の陥し穴 桜井秀雄
- 第5章 狩猟神事の盛衰 中澤克昭
- 第6章 長野県におけるニホンジカの盛衰史 小山泰弘
- 第7章 霧ヶ峰におけるニホンジカによる植生への影響 尾関雅章

あとがき 須賀丈

「まえがき」によると、シンポジウムを開催する（つまり、本書出版の）きっかけとなった問題意識は以下のようである。「…（日本の）大規模な草原は、絶え間ない火山活動か、さもなくば人間の強い干渉によってのみ維持される…日本の大規模な草原はいつ、どのようにして成立し、歴史的にはどのような人間活動によって、これまで維持されてきたのであろうか。」

本書のタイトルは「信州の草原」だが、おもに長野県東部の諏訪地方の草原（特に霧ヶ峰）が扱われる。信州という日本アルプスの山々（そのほとんどは非火山）が有名だが、本書で扱われる草原は森林限界の上の高山帯草原（お花畑）ではなく、極相は森林となるはずの場所に成立する二次植生としての草原である。これらの草原は火山性高原にあり、直接的な証拠はないものの「火山の爆発で植生が破壊されて…火山の周辺にできる草原」が起源であり、ヒトが「野火を放って草地を維持した」と想像される（まえがき）。火山起源で、その後は野火によって維持されてきたと考えられる点で、九州の阿蘇・九重地域の草原と共通する。

本書では、様々な研究分野から以上の問題への接近が試みられる。本書の親プロジェクトが文理融合アプローチを採用していることを反映し、本書も自然科学（生態学・土壌学）が中心だが、考古学・歴史学も扱われる。第1章から第3章（ただし、2章は阿蘇地方）では、かつて諏訪地方で野火によって草原が維持されていたことが土壌学から明らかにされる。そして、第4章と第5章では、そのような草原を舞台に野生動物の狩猟がさかんにおこなわれていたことが考古学・歴史学から考察される。第6章と第7章では、近年日本各地で顕著になっているニホンジカの個体数増加・食害問題が扱われる。ただし、ニホンジカは草原だけに生息するわけではなく、森林でも生息できる。日本全体ではむしろニホンジカは森林に住んでいるほうが普通ではないだろうか。本書のテーマである草原とニホンジカの関係が本書の中でどのように位置づけられているのかは必ずしも明確ではないと感じた。

同じプロジェクトの成果として、文一総合出版から『シリーズ日本列島の三万五千年—人と自然の環境史』全6巻が刊行されている。その第2巻『野と原の環境史』（2011年刊）では阿蘇九重地域の草原が扱われており、本書と相補的な位置を占めている。

（鹿児島大学理学部地球環境学科 相場慎一郎）

小椋純一著（2012）「森と草原の歴史」古今書院
360pp. ISBN:978-4-7722-8111-9 定価 5,200 円（税別）

本書の著者は、絵図に基づく日本の植生変遷研究の開拓者・第一人者である。この著者による最初の著作『絵図から読み解く人と景観の歴史』（雄山閣出版、1992）を読んだときは、植生研究にそのような切り口もあることを初めて知り、大変面白く感じた。当時は、著者が本書の「はじめに」で述懐しているように、絵図類に基づく植生研究はまだ珍しかったように思う。続いて、『植生からよむ日本人のくらし』（雄山閣出版、1996）が出版され、「迅速図」という明治時代初期の地形図や写真に基づく植生復元が試みられた。現在では絵図類の植生史料としての価値は広く認められるようになり、たとえば『森林飽和』（太田猛彦、NHK ブックス、2012）のカラー口絵にも白山山地での森林伐採を示す絵図が示されている。

本書は、そのような著者による久々の著書である。従来著者が得意としてきた絵図や古写真などによる方法に加えて、航空写真判読・樹幹解析・微粒炭分析などの自然科学の手法が用いられている。本書は前著の執筆以来書きためてきた大学紀要論文・報告書などを元にとまとめたものであり、内容も「文理混合」であり、著者自身は「落ち着いた内容」でないことを危惧しているようだが、日本の植生変遷を明らかにするという著者の問題意識は一貫しており、1冊の本としてのまとまりに難はないと思う。

本書の内容で特に評者が興味を持ったのは、第II部で扱われる草原と鎮守の森の歴史である。日本のほとんどの地域は温帯多雨気候にあることから、潜在自然植生は森林であると考えられている。日本では歴史的に人間が植生を利用し続けていたことはもはや常識であるが、それでも、日本列島は森林（人里の里山と奥山の原生林）で覆われていたはずだと漠然と考えてしまいがちである。しかし、近年の研究は、かつて日本には現在よりもずっと広く草原が分布し、「地域によっては森林よりも草原が多いところも少なくなかった」（本書まえがき）ことが明らかにされつつある。最近、日本の草原を主題にした本が相次いで出版されている（『草地と日本人』築地書館、『信州の草原—その歴史をさぐる—』ほおずき書籍など）。本書の「はじめに」でそれらが引用されており、本書はさらに進んでこの方面を勉強するきっかけになるだろう。本書は、国の統計や微粒炭分析により、この問題を扱っている。

里山的な景観が広がる人里において、社寺林＝鎮守の森は、原生林の面影を残し、その地域の「潜在自然植生」を示すモデルになると考えられてきた。しかし、本書は西南日本の神社林について、その起源は針葉樹主体の人工林であり、時代とともに遷移が進んで現在のような照葉樹原生林に見える状態になったことを示している。植生学のこれまでの常識を覆す見方であり、もし本書で明らかにされたような経緯が日本全国で一般的だとすると、筆者の言うとおりの、「日本の自然植生についての見方も、今後ある程度変わってくる」（「はじめに」）可能性があるかもしれない。

（鹿児島大学理学部地球環境学科 相場慎一郎）



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

協力研究員 (Affiliated Scientist) に関するお知らせとお願い

生態学研究センターでは全国共同利用研究施設として、開かれた研究活動を活発化するために、協力研究員制度を設けています。協力研究員は担当教員とご相談のうえ、施設の一部をセンター員に準じて利用できます。平成26年3月末で任期満了の協力研究員におかれましては、これまでのご協力に対して厚く御礼申し上げます。改めて平成26・27年度の協力研究員を募集いたします。新規及び引き続き協力研究員としてセンターの共同利用を希望される場合は平成26年2月28日(金)までに申請書をご提出いただくようお願いいたします。

申請書の様式はセンター HP (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/ecology/activities/images/gs0607.doc>) からダウンロードできますので、必要事項を入力のうえ電子メールでお送りください。なお、上記締切以後の申請についても随時受け付けています。

○ 申請書の提出先・問い合わせ先

京都大学生態学研究センター共同利用担当 〒520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
E-mail: kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp Tel: 077-549-8200 Fax: 077-549-8201

※京都大学生態学研究センター協力研究員の委嘱についての申し合わせ

1. 生態学研究センターの研究活動を推進するため、学内外の研究者に協力研究員を委嘱することができる。
2. 協力研究員は、教授会の議に基づき、センター長が委嘱する。
3. 協力研究員の任期は原則として2年とする。

センター関係者の動き

- 1) Tapan Kumar Kar 氏 (ベンガル工科大学 (インド)・教授) が、外国人研究員 (客員教授) として10月1日から12月31日まで滞在されました。
- 2) Elisabeth Joy Cooper 氏 (トロムソ大学 (ノルウェー)・准教授) が、外国人研究員 (客員准教授) として12月15日から3月14日までの予定で滞在中です。